キリスト教学研究室紀要

第 13 号

―論文―

殉教伝と夢 ― 天上の報いと執り成し ―

津田　謙治（1）

ルイジ・パレイゾンの解釈学 ― 聖書解釈の観点から ―

岡田　勇督（21）

―書評―

書評: 川口雄一著『南原繁 「戦争」経験の政治学』

塩川　礼佳（38）

あとがき

（65）

２０２５年 3月

京都大学キリスト教学研究室

あとがき

◆『キリスト教学研究室紀要』第 13 号をお届けいたします。京都大学キリスト教学専修（研究室）刊行の「研究室紀要」も、2013 年度の創刊から、今回で第 13 号を迎えました。紀要第 13 号を無事に刊行できたことについて、執筆者、そして編集担当者に心から感謝申し上げます。

◆京都大学のキリスト教学研究室は、教員と大学院生を中心に構成された研究者の研究共同体として運営されていますが、そこで取り組まれる研究テーマは多岐にわたっています。構成員（大学院生）が実際にどのような研究を行っているかは、本号に収録された「2024 年度・第二演習の記録」に記載された通りになります。

◆この「研究室紀要」は、キリスト教学研究室の研究内容を広く公開すると共に、所属の大学院生に論文などの執筆機会を提供することを目的としています。

査読体制の確立など、創刊当初からの懸案事項が存在するものの、当面は、大学院生の研究論文、研究ノート、書評に加え、教員（常勤と非常勤）や課程修了者による研究論文を掲載することによって、研究論集としての十分な水準が確保されるように心掛けたいと思います。

◆2020 年頃から起こった大規模な感染症被害は、以前と比較して大分落ち着きを取り戻し、授業や学会および研究室の活動など、2020 年以前の状況に戻りつつあります。講義や研究指導など、思想文化学系の他専修の先生方と協力しつつ、より一層の発展に努めて参りたいと思います。

◆2024 年度のキリスト教学専修では、学部卒業生 3 名（上地桃珠子、須和田唯、辻寛史）、大学院修士課程 1 名（叶一帆）が、それぞれ卒業論文と修士論文を提出し、それぞれの課程を修了しました。また、1 名（波勢邦生）の課程博士論文の試問が行われ、博士号が授与されました。それぞれの場での研鑽と飛躍を期待しております。

なお、2024 年度も、前年度に引き続きハイブリッド形式で予餞会を開催し、懇親会の方も行うことができました。また、2025 年度は、新たに学部生 2 名、大学院生 2 名がキリスト教学研究室に加わる予定です。

◆本紀要は、研究室のホームページ、あるいは京都大学学術情報リポジトリ（紅・KURENAI）において公開されており、基本的には電子ジャーナルとして企画されています。これまでは一定部数の印刷製本も行われてきましたが、2021 年度の第 9 号からは、冊子体の印刷は行わなくなりました。この電子ジャーナルによって、キリスト教学研究室の研究活動が研究室外の方々に広く知っていただけるならば、幸いです。

2025 年 3 月

キリスト教学専修・教授
津田謙治

2024 年度・第二演習の記録

〈前期〉

4 月 9 日	：津田謙治	「オリエンテーション」
4 月 16 日	：ティエリ・リチャーズ	「ローマ書研究 1-3 章における晩年期の内村鑑三の罪に関する解釈」
5 月 13 日	：西村一輝	「最初期パネンベルクのアナロギア批判におけるドゥンス・スコトゥスの受容について」
6 月 4 日	：塩川礼佳	「「抵抗」と「服従」の非戦論 ― 政池仁『基督教平和論』を読む」
6 月 25 日	：中尾直通	「証聖者マクシモスによるロゴス・ロゴイ論の意義」
7 月 9 日	：下村真代	「聴くこと・見ること・語ること ― 証言者をめぐって」
7 月 16 日	：メナチェ・アンドレス	「『日本のカテキズモ』に見られる若道とソドミーの問題」」
7 月 23 日	：潘　陽	「北村透谷「美妙なる自然 ― キリスト教と美術の間」

〈秋季・大学院生研究発表会〉

今年度は未実施。

〈後期〉

10 月 1 日　：ティエリ・リチャーズ　「人に喜びを与える花が黒い土から芽生える
— 内村鑑三における罪の理解」

10 月 8 日　：叶　一帆　「ルター派と改革派の「接触」」

11 月 12 日　：西村一輝　「W・パネンベルクにおける
K・バルトのアナロギア思想との対決」

12 月 17 日　：メナチェ・アンドレス　「初期宣教師たちとヴァリニャーノの思想」

1 月 7 日　：中尾直通　「証聖者マクシモスの神学における人間本性の意義 —
キリストの受肉と人間の神化
罪と苦しみ、そしてキリストのあがない」

〈春季・大学院生研究発表会〉

3 月 21 日：日本基督教学会・近畿支部会における個人研究発表予定者による予行演習。

『キリスト教学研究室紀要』について

以下に示す投稿規定、執筆要項は、『宗教研究』（日本宗教学会）に準じたものであるが、暫定的なものであって、随時改訂することになる。

A.『キリスト教学研究室紀要』論文投稿規定

１．投稿者は京都大学キリスト教学専修の教員（常勤・非常勤）と研修員、大学院生にかぎる。なお、ＯＤの投稿については、個別的に判断する。

２．内容は未発表の学術論文、書評論文であること。大学院生の投稿者の場合は、第二演習での研究発表などの論文化を原則とし、修士課程の学生の投稿は書評と研究ノートに限るが、本紀要における特別企画などに応募する場合には例外的に論文投稿を認めることがある。論文と書評の採択、またこの原則についての例外的扱いについては、編集委員会（当面は本研究室専任教員）が決定する。なお、研究ノートや諸報告などについても、論文や書評に準じて適宜判断する。

３．原稿は横書き、枚数は学術論文400字詰原稿用紙50～60枚程度（注・図表等を含む)、書評論文 400 字詰原稿用紙 15～20 枚程度とする。

４．電子データの書式は、横書き、40 字×30 行とし、400 字詰原稿用紙での換算枚数を付記する。

５．学術論文には欧文タイトル、氏名のローマ字表記を付記すること。

６．稿料は支払わない。

７．『キリスト教学研究室紀要』は基本的には電子ジャーナルとして刊行され、この号については冊子印刷は行わない。

８．掲載された論文は京都大学キリスト教学専修ホームページと京都大学学術情報リポジトリで公開する。そのため、当該論文の複製権と公衆送信権はキリスト教学研究室に委託されるものとする。ただしこれは、執筆者本人による複製権および公衆送信権の行使を妨げるものではない。

—2025 年 3 月 28 日発行—

The Annual Report on Christian Studies
XIII

CONTENTS

Article
The Acts of the Christian Martyrs and Dreams: The Retribution in Heaven and the Intercession
TSUDA Kenji (1)

Luigi Pareyson's Hermeneutics: Towards its Application to Biblical Hermeneutics
Yusuke Okada (21)

Book Review
Nambara Shigeru
Hiroka Shiokawa (38)

Afterword (65)

March, 2025
Faculty of Letters, Kyoto University, Department of Christian Studies
Kyoto Japan